



## 研成義塾と井口喜源治記念館

井口喜源治は、明治三年（一八七〇年）徳高町に生まれ、徳高の研成学校支校保等学校（後の東穂高小学校）に入学。松本中学校から明治法律学校に進むが学業なかばで、長野県の小学校の先生となり、上高井の小布施、松本開智小学校より東穂高小学校に勤務。同級生で新宿に中村屋を開業した相馬愛蔵等の始めた東穂高禁酒会に加わり「芸妓置屋設置」に反対運動を続け、排斥され公職を去る。

明治三十一年（一八九八年）相馬愛蔵、相馬安兵衛、臼井喜代らの協力援助を受けて、私塾「研成義塾」を設立した。

当時の因襲にとらわれた農村にあつて小学校を終えた子女に、研成の精神をいかした「自由と独立」を基にした家庭的な教育を施してきた。

教師は井口一人で英語・数学・漢文や彼の信仰するキリスト教聖書などを教えた。研成義塾の目的は「よき人」になることにあり、黙々と農村の青年の教育に励み昭和七年（一九三二年）まで明治・大正・昭和と三十四年間に、八〇〇人近くの教え子を世に送り出した。

井口喜源治記念館は、教え子たちが主になって井口の没後三十年経った昭和四十四年（一九六九年）に設立された。

この記念館を創立したいという念願の中心は、「井口の書籍、写真、書簡、その他研成義塾で使用された教科書等を永久に保存したい」という願いから出発した。井口の薫陶を受けた人々の熱意と努力、そして各方面の有志者の真心と善意の拠出とが結晶体となって達成されたものである。

『安曇野 人間教育の源流』―研成義塾に学ぶ― 井口喜源治記念館刊より

## 「井口喜源治聖書傍注」

はしがき

内村鑑三が「信州のペスタロッツチ」と称揚した井口喜源治（一八七〇（明3）年〜一九三八（昭和13）年は、一八九八（明31）年、アルプスの麓、安曇野の一角に研成義塾を建てて、若き人びとと共に、神を仰ぎ、友を信じ、志大にし、情操を深め、その感化を永遠に期して、真実の人格の育成に献身した偉丈夫であった。斉藤茂・横内三直編『井口喜源治』（一九五三（昭28）年、新版一九七八（昭53）年、井口喜源治記念館刊および、南安曇教育会刊）は、その面目を伝えて余す所がない。井口逝いてやがて八十年、その精神は今なお、否いよいよ、鮮烈に信州の、日本の教育の行方を照らす炬火である。

その井口の働きの源泉は、聖書一卷のうちに込められた神の恵みとそれに対する人間の応答の歴史であり、それをふまえて立つ人間の覚悟であった。そこに井口の心の拠り所があった。端正な字で遺愛の聖書の余白を埋め尽した傍注に見られる、凄まじいまでの聖書との取り組みの姿は、こんにちの私たちの盲点を如実に示すとともに、闇夜の光の所在をも示している。しかもその光・そのいのちは今もいささかも変わることなく、私たちの目と心を開かせ困難な生活の場・働きの場に勇氣と希望をもって立たせるであろう。

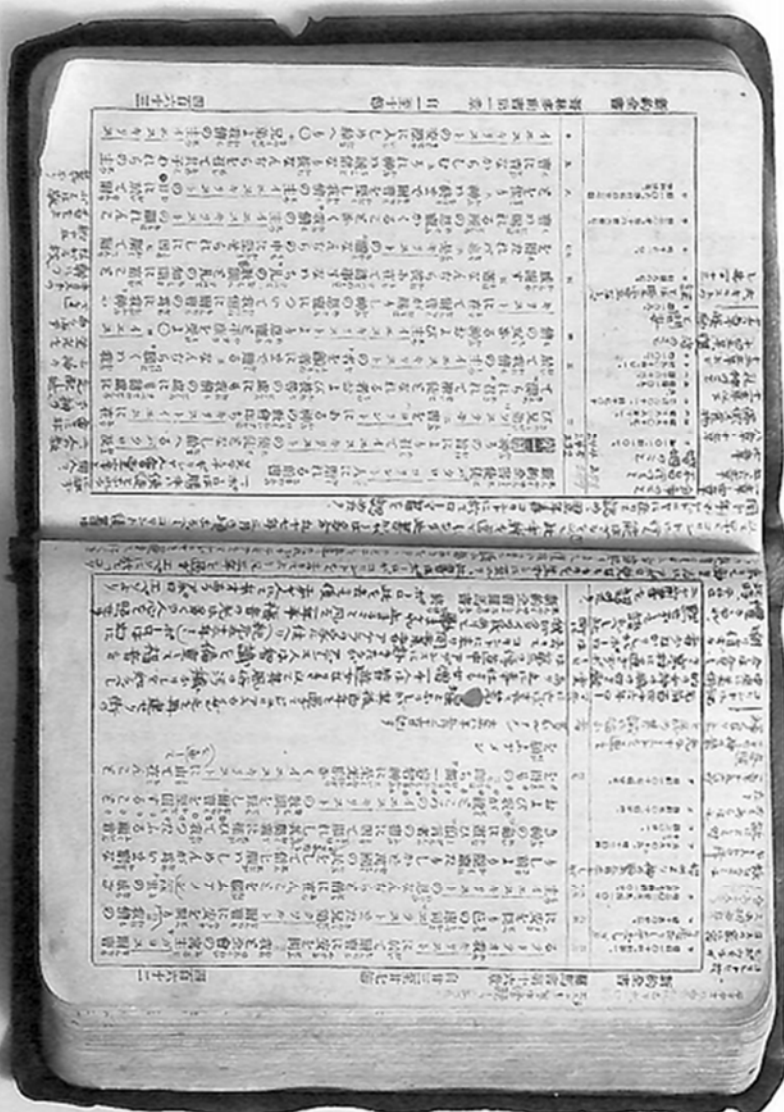
この思いをこめて、心ある友が井口とともに聖書に聴きそれに生きるべく、井口遺愛の聖書傍注を整理して公にできればとは私の多年の希いであった。しかし身辺の事情がそれを許さなかった私に代わって早くからこの希いに共感し、進んで編集・筆写の労を三十年にわたって担って下さったのは畏友水野威夫氏である。氏は長野県で小学校教諭を務めながら当時山梨医科大学に勤

務していた小生の所に内地留学され、ギリシャ語を学びプラトンや新約聖書とともに読み、その後も、本務はもちろん、上記の研鑽も孜孜として励んだ篤学の士である。

その仕事の詳細は同氏のあとがきに譲るが、このすべての背後には、同氏を中心とした幾多の有難い協力があったことを銘記しておきたい。さらにこれをワード化し、一般に読みやすくする作業には大山美根子（旧約）、井出秀（新約）のお二人の、全体を保管して広般の利用に供するには今井館教友会大山綱夫理事長はじめスタッフの方がたの、献身的なご協力をいただいた。溯ってこの貴重な聖書の複写を許された当時の井口記念館長・等々力古吾朗氏をはじめ歴代の館長、スタッフの方がたのご好意は忘れられない。あらためてここに感謝を捧げ、館のご清栄を祈る。

川田 殖

新約全書 明治三十七年刊  
 井口喜源注 大正六年四月二十六日脱字  
 の日付あり



井口喜源治 聖書の書き込み

## 凡例

本書は、井口喜源治が使用した聖書（三冊）への書き込みを整理したものである。これらの聖書は、井口喜源治記念館に所蔵されている。内訳は以下の通り。

旧・新約聖書	発行日	明治37年3月31日
新約聖書	発行日	大正6年10月5日
新約聖書	発行日	大正13年10月1日
		改版発行

「聖書傍注」という名称は、聖書本文の傍らに書き込まれた注記を意味するものである。編集は以下の手順で行われた。

有志により、はじめに転記され、さらに電子テキスト化のために入力されたものである。なお、この度の編集は、傍注を読みやすく、利用しやすいことを優先した。そのため、原本の表記を変更した箇所もある。さらに、原本の破損や手書きのため、判読しきれない箇所もあった。そのため、さらなる研究の場合、オリジナル（原本）による確認が必要と思われる。

書中略語記號ヲ用ユル事左ノ如シ  
 (書名略語・著者による分類表)

略語記號	書名	分類	著者による	文語訳 (一九五三年版)	書名 (参考)
創	創世記	五書 (法律)		創世記	
出	出埃及記	同		出エジプト記	
利	利未記	同		レビ記	
民	民數紀略	同		民數紀略	
申	申命記	同		申命記	
書	約書亞記	二預言書 (預言)	預言前集	ヨシユア記	
士	士師記	同	歷史	士師記	
得	路得記	雜書 (詩歌)	五つの巻物	ルツ記	
母前	撒母耳前書	預言書 (預言)	預言前集	サムエル前書	
母後	撒母耳後書	同		サムエル後書	
王上	列王紀略上	同		列王紀略上	
王下	列王紀略下	同		列王紀略下	
代上	歷代志略上	同		歷代志略上	
代下	歷代志略下	雜書 (詩歌)		歷代志略下	
喇	以上喇書	同 (詩歌)		エズラ記	
尼	尼希米亞記	同		ネヘミヤ記	
帖	以上帖書	同 (詩歌)	五つの巻物	エステル記	
百	約百記	同 (詩歌)	哲學的劇詩長篇	ヨブ記	

馬亞基番哈翁米拿阿麼耳何但結哀耶賽歌傳箴詩

詩篇  
箴言  
傳道之書  
雅歌  
以賽亞書  
耶利米亞記  
耶利米亞哀歌  
以西結書  
但以理書  
何西阿書  
約耳書  
亞麼士書  
阿巴底屋書  
約拿書  
米迦書  
拿翁書  
哈巴谷書  
西番雅書  
哈基書  
撒加利亞書  
馬拉基書

同 (詩歌)  
同  
同 (詩歌) 五つの巻物  
同 (詩歌) 五つの巻物  
豫言後集 (說教集) 三大預言書  
同  
同 (詩歌) 五つの巻物  
預言書後集  
雜書 (詩歌)  
十二小預言書  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

詩篇  
箴言  
傳道之書  
雅歌  
イザヤ書  
エレミヤ記  
エレミヤの哀歌  
エゼキエル書  
ダニエル書  
ホセア書  
ヨエル書  
アモス書  
オバデヤ書  
ヨナ書  
ミカ書  
ナホム書  
ハバクク書  
ゼパニヤ書  
ハガイ書  
ゼカリヤ書  
マラキ書

以上  
舊約全書

略語記號

書名

分類

太 馬太傳福音書  
 可 馬可傳福音書  
 路 路加傳福音書  
 約 約翰傳福音書  
 徒 使徒行傳  
 羅 羅馬書  
 哥前 哥林多前書  
 哥後 哥林多後書  
 加拉太書  
 弗 以弗多書  
 腓 腓立比書  
 西 哥羅西書  
 撒前 帖撒羅尼迦前書  
 撒後 帖撒羅尼迦後書  
 提前 提摩太前書  
 提後 提摩太後書  
 多 提多書  
 門 腓利門書  
 來 希伯來書  
 雅 雅各書

文語訳（一九五三年版）書名（参考）

マタイ傳福音書  
 マルコ傳福音書  
 ルカ傳福音書  
 ヨハネ傳福音書  
 使徒行傳  
 ロマ人への書  
 コリント人への前の書  
 コリント人への後の書  
 ガラテヤ人への書  
 エペソ人への書  
 ビリピ人への書  
 コロサイ人への書  
 テサロニケ人への前の書  
 テサロニケ人への後の書  
 テモテへの前の書  
 テモテへの後の書  
 テトスへの書  
 プレモンへの書  
 ヘブル人への書  
 ヤコブの書



彼前  
彼後  
約壹  
約貳  
約參  
猶太  
黙示録

彼得前書  
彼得後書  
約翰壹書  
約翰二書  
約翰三書  
猶太  
約翰黙示録

ペテロの前の書  
ペテロの後の書  
ヨハネの第一の書  
ヨハネの第二の書  
ヨハネの第三の書  
ユダの書  
ヨハネの黙示録

以上  
新約全書

聖書引照箇所を表記について

- ・ 井口による表記方法は、統一されているわけではない。
- ・ オリジナルを尊重しつつ、統一感と判別のしやすさを考慮して、以下の表記方法を用いた。
- ・ 書名は、凡例の通りとした。
- ・ 口語訳聖書で書名がカタカナで表記されるものは、ルビを付した。
- ・ 章は、漢数字で表記した。
- ・ 節は、アラビア数字の横組みとした。
- ・ 章節のみの表記は、傍注の対象となっている書名が略されることがある。
- ・ なお、注の文中の表記は、これに該当しないことがある。

創世記一二章三節 ← 創一二三

約翰壹書四章一八節 ← 約翰<sup>ヨハ</sup>四 18

聖書本文と語句は、次のように表記する。

- ・ 聖書本文は、節番号に続いて、 1 ～ 2 「……」のように引用する。
- ・ 聖書本文中、注に該当する語句は、右記引用に続いて、「…」で記載する。
- ・ 聖書の語句のみ記載で、注の文章が記載されていないものは、該当の語句に、傍点・傍線などが付されたこと  
とを意味する。

傍注は、○以下に記載する。総括的内容及び章節が限定されない場合は、一行空けて表記する。  
判読できなかった文字は、…□…もしくは(不明)と表記した。